

土木殿御返事

文永八年九月一五日 五〇歳

此の十二日酉の時御勘気。武蔵守殿御あづかりにて、十三日丑の時にかまくらをいで
↳佐土の国へながされ候が、たうじはほんまのえちと申すところに、えちの六郎左衛門
尉殿の代官右馬太郎と申す者あづかりて候が、いま四・五日はあるべげに候。

御歎きはさる事に候へども、これには一定と本よりごして候へばなげかず候。いま
↳で頸の切れぬこそ本意なく候へ。法華經の御ゆへに過去に頸をうしなひたらば、か
る少身身のみにて候べきか。又「数々見擯出」ととかれて、度々失失にあたりて重罪消をけし
てこそ仏にもなり候はんずれば、我と苦行をいたす事は心ゆへなり。

九月十五日

日蓮花押

土木殿御返事

上のせめさせ給ふにこそ、法華經を信じたる色もあらわれ候へ。月はかけてみち、しを
はひてみつ事疑ひなし。此も罰あり必ず徳あるべし。なにしにかなげかん。